

偽りの錬金術師 エイルマー — 科学者と作家に対するホーソーンの姿勢

辻 祥 子

I

短編執筆の青年期から未完の遺作を手がけた晩年まで、ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)は不老不死や永遠の美といった錬金術のテーマを扱いながら、科学者や作家といった真理探究者のあり方を模索しつづけた。「痣(“The Birthmark”)」(1843)に登場する科学者エイルマー(Aylmer)が妻ジョージアナ(Georgiana)の頬の痣を消そうとする試みにも、錬金術の手法が使われていることは、すでに1970年代のガッタ(John Gatta)やヴァンリア(David M. Van Leer)による先行研究で指摘されている。しかしながら、エイルマーと錬金術師の共通点よりも違いを重視することで、ホーソンの真意がより正確にくみ取れると思われる。最近の研究の中では松尾氏がそのことに着目し、錬金術が単に前近代的な胡散臭いものとしてではなく、「知とともに心を練り上げる」学問としてホーソンから肯定的に評価されていること、一方エイルマーは途中からそういった「精神修養としての科学(錬金術)を放棄している」(67)ことを論じており注目に値する。そこで本稿では、松尾氏が挙げた錬金術師とエイルマーのスタンスの違いについて、さらに踏み込んだ分析を行い、作者がエイルマーを通して、18世紀末から顕著になる科学の発達と科学者の台頭をどのように批判しているのかを探りたい。

その一方で、ホーソンは同じ真理探究者として、錬金術師と作家の間に共通点を見出し、錬金術師の道はずれるエイルマーが、物書きとしても過ちを

犯してしまう姿を描いている。エイルマーと錬金術師は、探究の方法だけでなく執筆活動においても対照的に描かれていることに注目したい。一部の信頼できる読者に向けて、秘密の知識を伝授する錬金術師と違い、エイルマーは、妻という貴重な読者と心の底から共感しあうことを避けて、孤高の執筆活動に没頭する。エイルマーの挑戦と挫折を通して、ホーソーン自身が作家としてのあり方を模索していると考えられる。この点も明らかにしたい。

II

まずエイルマーは、錬金術から近代科学が分離する18世紀後半の過渡期に、錬金術の基本精神から逸脱して探究を続ける科学者として描かれている。エイルマーの探究と錬金術はどこが重なり、どこが違うのだろうか。最初に両者の共通点から確認しておきたい。

エイルマーの探究の一番の目的は妻の頬の痣を消し、完璧な美を実現することである。彼はその過程で錬金術を使おうとしている。錬金術は、目に見える（物理的・世俗的）成果を引き出す顕教的錬金術と、目に見えない（精神的・宗教的）成果を引き出す秘教的錬金術（錬心術）の二つに分けられるが（澤井32-33, ホームヤード 2）、エイルマーの美の探究は、前者の顕教的錬金術、つまり、生命の創造（男女の結合）など自然界の秘密を解き明かし、その知識をもとに、卑金属から貴金属への変性や不老不死の薬の調合をめざす方法と重なる。彼は若いころから人体の不思議に興味を持ち、自然が人間を創造する過程を解明しようとしていた。そして今回、その研究を復活させ、妻の痣の除去に応用しようとしている。またエイルマーは妻に、「何代にもわたって、下等な卑金属から『黄金素』を抽出する万能の溶媒をもとめた『錬金術学者』たちの連綿たる歴史を説明してきかせ」（46）¹⁾ さらに彼らが関心をよせた「不老不死の霊薬」の話をし、妻の痣の除去には、それを希釈した美白薬よりもっと肌の奥まで浸透する薬が必要だという。つまり、彼は目に見える成果を求めると

いう点で、顕教的錬金術と接点を持っていると考えられる。

またエイルマーの関心は、もう一つの錬金術、つまり精神的、宗教的向上を目指す秘教的錬金術（錬心術）とも重なっている。この錬金術は、卑金属から貴金属を生み出す技術を応用して、低俗で野獣的な存在を、高尚で純粋な存在へと高めることを目的としている（澤井 32-33）。宗教的には、罪深い人間が祈禱や神への帰依によって完全な人間に転生することを目指す（ホームヤード 2）。実際、ジョージアナの頬の痣は、単に彼女の美しさを損なうだけでなく、人間の罪や死などという地上的欠陥の象徴となっていると信じられている（37, 39）。そしてその痣が手の形をしていることに関しては、死という地上的欠陥が本来崇高なジョージアナという存在を掴んで、野獣と同等のもっとも低いレベルにまで引き下げるときの苦悶の手を象徴していると言われる（39）。そのような痣を消そうとするエイルマーの試みは、逆に低いものを高いものへと昇華させる秘教的錬金術の試みと重なってくる。

しかし、エイルマーと錬金術師には決定的な違いがある。彼は錬金術の鉄則を大きく逸脱しているのだ。その鉄則は、エイルマー自身の口から語られている。彼によると、「（錬金術の）奥義をきわめる哲学者は、あまりにも崇高な英知をわがものとしてしまうから、低俗なレベルに身を落としてそれを実用化することはできないのだろうということだった」（46）。さらに彼は、自分には寿命を無限に引き延ばす不老不死の霊薬を作ることができるが、もし作ると「自然界に不調和が生み出されて、世界中が、そしてなかでも主としてその不老不死の特効薬を飲んだ者たちが、結局それを呪うようなことになってしまう」（46）と言う。そこでジョージアナが「そんな力を持つなんて」（46）と恐ろしがると、エイルマーは、「私は、自分たちの生活にそんな不調和な結果をもたらして、君や私を不幸な目に遭わせない」（46）と誓う一方で、「でもそれに比べたら、この小さな『手』を取り除くのに必要な技術など、どんな些細なものか、君に考えて欲しいんだよ」（46）と理解を求める。

ここには、錬金術師の二つの鉄則が暗示されている。一つは、錬金術師は自

分が発見した英知を、決して実際に活用してはならないということである。錬金術の歴史を解説したホームヤードによると、実際的な錬金術師は、人工的に金を作った、あるいは不老不死の薬を発見したと疑われるだけでも、その技術を奪おうとする強欲な諸侯や邪悪な人々によって深刻な生命の危険にさらされるだろうことは十分承知していたという（ホームヤード 2）。つまり錬金術を実際に使うということは、それを世俗的欲望の対象にすることである。そうなると、先ほどのエイルマーの指摘にもあるように、錬金術師がせっかく「崇高な英知をわがものに」（46）しておきながら、自ら「低俗なレベルに身を落とす」ことになってしまう。

錬金術の第二の鉄則は、エイルマーが何度も強調していた「自然」との調和である。「自然」とは、すなわち自然界やそれを作った神のことを指す。アロマティコは、錬金術と科学の違いは、この「自然」との調和を守るか否か、によるとしている。

錬金術とは、天上界も地上界も同じ仕組みでできているということを前提に、神の世界創造において働いたのと同じ原理を実験器具の中で再現しようという試みなのである。「火を用いる哲学者」と呼ばれる錬金術師は、神が宇宙において大規模に行ったことを、実験室の中で小規模に再現しようとする。それゆえ錬金術師は、実験を行いながら自らの歩調と自然の歩調が対応するように配慮する。これこそが、錬金術と現代科学の大きな違いの一つである。現代の科学が支配し利用するために認識するのに対し、錬金術は認識し超越するために利用するのである。（25-26）

すなわち、錬金術は「自然」に対する認識を最終的な目的とするのに対し、科学は「自然」に対する支配・利用を最優先の目的とする。「瘧」の中で紹介される中世の錬金術師や哲学者たちは「『自然』を超越する力を持っていると信じられており、彼ら自身もそのように想像したかもしれない」（48）という。

しかしあくまで想像のレベルで、実際に支配を試みたわけではないのである。またホーソン晩年の未完作『セプティミアス・フェルトン (*Septimius Felton: or, the Elixir of Life*)』(1872)では、おなじく錬金術を使って不老不死の薬を探求するセプティミアス自らが「人の延命に『自然』の力、『自然』の営みが応用できるが、これは『自然』との協調と協力によってのみ可能になる」(176)と断っている。

このように錬金術の鉄則をみた上で、あらためてエイルマーの行動を検証すると、鉄則を十分理解しているはずの彼が、結果的にはそれを踏み越えていることがわかる。錬金術の実用化を禁じた第一の鉄則を彼が破ることになるのは、ジョージアナという具体的治療対象を得たごく最近のことである。

もっと若いころに、彼は人体の不思議を研究しては「自然」が大地と空気、および精神界の貴重な力をすべて同化してその最高傑作である「人間」を創造し、はぐくむにいたる、その過程そのものを推し量ろうと企てたのであった。(42)

しかし、その試みは「われわれの偉大な創造者たる『母』がなかなかその創造の手の内を見せてくれない」(42)ため、挫折していた。過去の錬金術師もこうした挫折を無数に繰り返してきた。つまり、この時点でエイルマーはまだ、錬金術師の活動の範囲内にいたのだ。

しかしながら、今エイルマーは、なかば忘れかけていたこうした研究に再び着手したのだった——もちろん、最初にそれを思い立ったときの希望や願いを抱いてのことではなく、それが生理学上の真理を多く含んでいて、ジョージアナの治療に対する当面の計画を遂行するためにはどうしても避けて通ることができないものであるからにほかならなかった。(42-43)

このように、ジョージアナの痣を取ろうとしたときに、彼は錬金術の英知を治療という実際的なものに使うことになるのだ。さきほど紹介したように、エイルマーは妻に、自分がやろうとしていることは錬金術よりはるかに些細な試みだといっていたにもかかわらず、実際は錬金術を応用して、ジョージアナの体の奥深くまで届き、命まで奪うような強力な薬を作ることだったのである。また、彼は自分の書いた本を「錬金術師の本」(49)と呼ぶ。しかし彼の本は「熱烈で、野心的で、想像的であるばかりでなく、同時に実際的で労苦にみちた人生の歴史であり象徴だ」(49)と言及され、彼が錬金術的関心を超えてそれを実用化する目的を持っていたことが示唆されている。

さらに彼は、錬金術の第二の鉄則である「自然」、すなわち自然界や神との調和も破り、自然界の支配さえ目論んでいたといえる。ここでエイルマーが取ろうとする痣の意味を改めて考えたい。エイルマーは妻に「君は『自然』の手によってほとんど完璧に作られているが、それだけにこの世の不完全さの目に見える印として、ほんの些細なその欠点が私にショックを与えるのだよ」(37)というが、その印をつけたのも「自然」＝神の手なのである(Zanger 368)。痣は、神の手で作られた創造物たる証拠であり、さらには神の支配の象徴でもある。そのいわゆる神の手型は、「人間の手の形に少なからず似ていた」(38)。しかしここに人間に対するある種の畏が仕掛けられている。人間は神の手が人間の手とそっくりであると思ひ込む、さらに勘違いして人間の手が神の手を取って代われると信じてしまうのだ²⁾。実際エイルマーは、この神の手にも果敢に挑むことになる。科学の進歩が目覚ましい18世紀後半、「一部の信奉者は、天地創造の力の秘密に手を触れ、おそらくは新しい世界を自分の力で作り上げることになるに違いない探究を信じていた」(36)という。当初エイルマーは、「『自然』を支配しうる人間の究極的な力に対して、これほどまでの信念をもっていたかどうかはわからない」(36)と曖昧に書かれているが、彼が自然界や神に対する支配の野心を持っていたことは彼が有頂天になって叫ぶ次のせりふからも見て取れる。「ジョージアナ、君のおかげで私は科学の神髄にいままで

ないほど深く迫ることができるんだよ。このいとわしい頬を、もう片方の頬と変わらぬくらい完全無欠なものにすることが十分できると信じているのだ。それにそうになったら、『自然』がそのもっとも美しい創造物の中に不完全な形で残したものを矯正した暁の私の勝利はいかばかり大きいだろう！」(41)。こうした野心を胸に、エイルマーは自らの手で生命の創造の秘密をつかみ、その知識をもとに、神の手型と支配権を両方奪い取ろうとする。

こうしてみると、エイルマーは明らかに「自然」=神との調和を保ちながら英知を追求する錬金術者から、その英知を実際に活用し、神をも凌駕しようとする科学者へと変貌していることがわかる。ホーソーンは、科学が「自然」の歩調を上回るスピードで発達し、世界を掌握していく19世紀半ばにいて、18世紀後半という科学と錬金術の分岐点にまで遡って警鐘を鳴らしていると考えられる。

しかし一方で、エイルマーの試みはあらゆる観点から失敗に終わることにも注目すべきだ。まず目にみえる成果を期待する顕教的錬金術の観点からみたい。エイルマーは痣を取って完璧な美を手にいれようとして、ジョージアナの生命まで奪ってしまう。「真正の錬金術は金属を完全化し、健康を保持することにある。これに反して贗の錬金術は金属をも健康をも破壊することにある」(ロラ10)と定義されていることを考慮すると、妻の健康ばかりか命をも破壊したエイルマーの顕教的錬金術は贗物といえる。

それでは、目に見えない成果を求める秘教的錬金術の観点からは、エイルマーの試みはどう評価できるのか。前に見たように、作品のはじめのほうでは、罪や死の象徴である手の痣は、崇高なジョージアナを地上的なレベルに引き摺り下ろすものであるとされていた。そこで、痣を取り除けば、ジョージアナの存在は地上にいながら天上的なものになるはずであった。しかしながら作品の最後では、痣の捉え方がまったく違うことに注目したい。

…(痣は、) 天使のような精神が死すべき肉体と結合する絆にほかならな

かったのだ。その痣——人間の不完全さを示す唯一の象徴——の最後の真紅の色合いが彼女の頬からうすれてゆくにつれて、いまや完全になったこの女の最後の息は宙に流れ出、彼女の靈魂は、夫のそばに暫したゆたいながら、天に向かって飛翔していった。(55-56)

彼女は完全になっても、地上にとどまることができていない。ここで、痣の役目に関する解釈が180度変えられていることがわかる。つまり、痣のせいで天上的なものが地上的なものに貶められていたのではなく、痣という絆のおかげで、この世で地上的なものが天上的なものと結びついていられたのだ。この痣のイメージは、錬金術が「地上界と天上界、物質と精神の間に開いた淵の上に橋を架ける虹である」(ロラ 4)といわれていることと重なる。つまり痣は、錬金術の知恵を象徴したものとも言えるのである。痣を取り除くということは、錬金術そのものを否定することになる。それを暗示するように、本文では次のように語られている。

痣のあったときも恐ろしかったが、それが消えてゆくさまはさらにいっそう恐ろしかった。虹の色合いが空から薄れてゆくのをみつめれば、どんなふうにもこの神秘的な象徴が消え去っていったかがわかるであろう。(54)
(アンダーライン 筆者)

こうしてみると、エイルマーの秘教的錬金術も失敗であることがわかる。

さらに科学者エイルマーは、錬金術の枠を超えて自然界を支配する試みも失敗する。「痣は、私の想像力をしっかり掴んでしまっていた」(40)と彼は告白する。つまり彼は、神がつけた手型を捉えようとして、逆に捉われている。やがて彼は、痣を取らねばならないという「ただ一つの観念が自分の精神に対していかに専横な力をふるっていたかということ」(40)を自覚する。その一方で、手の形の痣は、ジョージアナの心臓も掴んでいる(40)。つまり痣はジョ

ージアナを人質に取りながら、一方でエイルマーの心を誘惑し、痣を取りたい欲求に駆り立てるのだ。エイルマーは、神がつけた手型に完全に掌握され翻弄されているといえる。またウインSTEINも指摘するように (Weinstein 49), エイルマーが痣取りに執着する一方で、実験室に侵入した妻の腕を掴んだとたん、「新たな痣 (the print of his fingers)」(51) をつけてしまうという場面にもホーソーンの皮肉が読み取れる。

以上のことからわかるように、科学者エイルマーの試みは、錬金術からの逸脱によって挫折を強いられている。ホーソーンは、偽りの錬金術師エイルマーを通して、科学的探究のあり方を批判していたことは明白である。

III

これまでエイルマーの科学的探究の姿勢に注目し、錬金術師との違いを明らかにしたわけだが、今度は彼がその探究をもとに本を執筆する過程に注目してみたい。ホーソーンはロマン主義の作家として、自然の仕組みを謙虚に解明し文字にしていく錬金術師の仕事に共感する一方で、エイルマーの不遜な、そして独りよがりの執筆態度を批判しているのだ。この点について見ていきたい。

まず、錬金術師とロマン主義作家の関心が一致することは多くの批評家が指摘するとおりである。

自然の本質とは何かという問題を自分の意識の中に取り込もうとする詩人や哲学者は、化学、あるいは錬金術的な課題をむしろ積極的に利用していた。そうした傾向は、18世紀末から19世紀初頭にかけて巻き起こったロマン主義において顕著に見ることができる。(中略) 錬金術師が抽出しようとした世界の根底に横たわる眼に見えない神秘的な物質、あるいはエネルギーはロマン主義詩学の中心概念であり、詩人による創造活動の原理を指す想像力とそれほど遠いところにあるのではない。(吉村 119-123)

作家ホーソンも、自然の本質とは何かという問題において、錬金術師と関心を共有していたと考えられる。ただし、さきほど考察したように、錬金術師は自然界で行われていることを、実験室で小規模に再現し、それを記録するのであって、決して実際に自然界を支配することは望まなかった。ホーソンは、錬金術師のそうした謙虚な執筆の姿勢をも支持していたと考えられる。

さらに、ホーソンは錬金術師と、その本を読む読者との関係にも共感していたことがわかる。アロマティコによると錬金術師は、「錬金術がもたらす思想的な成果と科学的成果を他の人々に分け与える一方で、だれにでも分け隔てなく技術や知識が与えられることによって錬金術が大衆化することを防がないといけない」(46)わけである。そこで、錬金術書は「わざと難解な概念を使うことによって、知識を伝授するに値する者とそれに値しない者を選別する側面を持っていた」(46)。そこには「常識的な考え方からは理解できない一説や長々と形而上学的思索について論じた章や神話を使ったアレゴリーなどが次々出てくるが、それらにたぶらかされてはならない。これらの不可解な記述は、門外漢を排除するために挿入されている」(46)というわけである。つまり錬金術師は、極めて高い理解力のある人だけに、秘密の知識を伝えようとする。こうした限られた読者との信頼関係に基づく執筆活動は、ホーソン自ら、実践していたと考えられる。『緋文字』の序文を見てみたい。

著者が書物を世に問うときには、大抵の学校友達や生涯の伴侶より著者をよく理解する数少ない人たちに語りかけるのであって、その書物を途中で投げ出したり、全然見向きもしない多くの人たちに向かって語りかけるのではない。もっとも、ある種の著者は、これ以上のことをやっつけてのける。完全に心と思いが通じあっている者に対してしか妥当でないような…仕方で、深い内心の秘密を告白するのである。まるで、印刷された本というのは、この広い世の中に投げ出されると、作者の本性をそなえた分身を必ずや見つけ出し、それと合体することによって自分の存在の環を完成させ

ることができる、といわんがばかりである。(3)³⁾

ここには、作品と限られた読者の間の合体、存在の環の完成という錬金術的発想が盛り込まれている⁴⁾。ホーソーンは、自らがロマンスの錬金術師として、自分の作品（発端）と厳選された心ある読者（終末）とを合体させることでその作品を完全なものにしようとしているのである。

ここで、エイルマーの執筆行為を問題にしてみたい。ジョージアナの痣は、神の手が書いた「手書きのサイン (sign manual)」(38)、あるいは「自然がすべての創造物に押し刻印 (stamp)」(38-39) や「押印 (impress)」(42) といったイメージで語られていた。一方で、その神の手に対抗するエイルマーは、自らの手を使って克明に自分の実験結果を本の形に書きつけ、彼の「強烈な思索は、その刻印 (stamp) を本の1ページ、1ページに押し付けて」(54) いくのだ。あたかも刻印を押す主体は、自然でなく自分であることを誇示するかのよう。エイルマーのこのような執筆行為の描写は、超越主義者エマソンが、自然の法則はすべて人間の精神の法則であり、自然界は人間の精神の「印形 (seal)」がつけた「押印の跡 (print)」にすぎないと論じた(59) ことをもとにしているのはよく知られている。つまりエイルマーは、執筆行為の中でも自らが神であるがごとく振舞うわけだが、これは錬金術の鉄則にも反するし、作家ホーソーンにとっても受け入れられない。

さらに、エイルマーと読者ジョージアナの関係について注目したい。妻のジョージアナが書齋に忍び込む場面に注目すると、過去の錬金術師たちが書いた書物は「古くて謎めいて」いたが(48)、そのうちのいくつかの章に関心をもったジョージアナは、彼らが自然を超える力を獲得したと想像していたことなどを知る。また別の書物から、研究者たちが奇跡を記録したり、奇跡をつくりうる方法を提案していることも知り、それなりに興味をそそられている。錬金術師たちが、門外漢を排除した本の書き方をしていることを考慮すれば、ジョージアナの読解力は、人一倍高いと考えられる。そのジョージアナが、一

番夢中になって読むのがエイルマーの書物である。彼女はそこから、理想を求めて格闘し、挫折を繰り返す姿を読み取り、感銘を受ける。この書物を執筆した当時の彼は、まだ自らの限界を認める謙虚さがあつた。

彼の業績はたしかに偉大ではあつたとしても、もっともすばらしい成功でさえも、彼が目標とした理想に比べればほとんど常に失敗であることを見てとらないわけにはいかなかったのだ。彼のつくったこのうえなく輝かしいダイヤモンドといえども、彼のおよびもつかぬかなたに秘されているはかりしれないほどに貴重な宝石に比べれば、まったくのただの石ころにすぎなかつたし、彼自身にもそう感じられていた。…この書物は、その著者に名声を勝ち得たかずかずの業績を豊かにふくんでいながら、しかも、かつての人間の手が書き記した記録のなかでもっとも物悲しいものであつた。(49) (アンダーライン 著者)

この書物にひどく心を動かされたジョージアナは、エイルマーに心から同情し、「ほんの一瞬でもいいから、彼のこのうえなく高邁深遠な想いを満足させてあげる」(52) べく、彼の実験のために自らの命を捧げる決心をする。

すでに見たように、エイルマーはこの本の執筆当時から変化している。瘡の除去に着手して以来、自分の成功だけを信じるようになっていくのだ。さらに彼は、妻という読者との強い結びつきを求めない。彼女が昔の自分の書物を読んで涙を流していても、「不安と不快の色」(49) を顔に浮かべ「今度のこの一つの成功を待つがいい」(50) といい、新たな執筆に没頭するだけで、彼女と本当の意味で心を通じ合わせることはできないのだ。ジョージアナこそ、彼の書物の唯一の読者であり、彼のこれからの挑戦も、その先の挫折もすべて見通している最高の理解者であることに彼は気づかないのである。

このようにエイルマーは、執筆を通して世界を掌握しようとする不遜な作家として描かれると同時に、錬金術的な「限られた読者との合体」や「存在の輪

の完成」を望むことはせず、妻の瘵を冷たく観察しては筆を走らせる孤高の作家として描かれる。ジョージアナの死とともに、彼の書いたノートは、読者を失い、永遠に開かれることはない。そして彼は致命的な失敗とともに記録の筆を折ることを余儀なくされる。そこに、エイルマーの執筆態度に対するホーソーンの痛烈な批判が読み取れる。

これまで見てきたように、エイルマーと錬金術師を、探究や執筆の姿勢において比較することで、科学者の台頭に対するホーソーンの危惧や作家としてのあり方をめぐる独自の考えが浮き彫りになった。偽りの錬金術師の悲劇から学ぶべき教訓を、ロマンスの錬金術師ホーソーンは、ごく限られた理解力のある読者だけに伝えたのである。

*本稿は日本ナサニエル・ホーソーン協会第24回全国大会（2005年）における発表に加筆修正を施したものである。

注

- 1) 「瘵」の訳は大橋健三郎訳（『世界文学全集』第30巻 集英社 1980年）を参考にした。
- 2) この信念は、よく知られているように、ホーソーンが懐疑的であった超越主義者エマソンの思想に基づいている。エマソンは、「現代の自然科学は魂の巨大な手の最初の模索に過ぎない」（56）とし、人間の探究の無限の可能性を信じたのであった。
- 3) 『緋文字』の訳は八木敏雄訳（岩波書店 1992年）を参考にした。
- 4) 錬金術では、貴金属を精製したり、純粋な魂を抽出したりするのに必要な蒸留というプロセスを、蒸気の上昇と下降が繰り返される円環運動として捉えている。また錬金術の絵画によく描かれる宇宙蛇ウロボスの図は、口で自らの尾を噛んでいるその様子から発端と終末の結合を表し、再生・物質の統一性を意味する（澤井 60, 115）。

使用文献

- Emerson, Ralph Waldo. "The American Scholar." *Lectures and Biographical Sketches*. New York: AMS Press, 1968. 53-71.
- Gatta, John, Jr. "Aylmer's Alchemy in 'The Birthmark'." *Philological Quarterly* 57 (1978): 399-413.

- Hall, David D. "Introduction: The Uses of Literacy in New England, 1600-1850." *Printing and Society in Early America*. American Antiquarian Society, 1983. 1-47.
- Hawthorne, Nathaniel. "The Birthmark." *Mosses from an Old Manse. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (以下, CE). Vol. 10. Ed. Thomas Woodson, et al. Columbus: Ohio State UP, 1974.
- . *The Elixir of Life Manuscripts: Septimius Felton; Septimius Norton; The Dolliver Romance*. CE. Vol. 13. Ed. Thomas Woodson, et al. Columbus: Ohio State UP, 1977.
- . *The Scarlet Letter*. CE. Vol. 1. Ed. Thomas Woodson, et al. Columbus: Ohio State UP, 1962.
- Van Leer, David M. "Aylmer's Library: Transcendental Alchemy in Hawthorne's 'The Birthmark'." *ESQ*, Vol. 22, 4th Quarter 1976. 211-220.
- Weinstein, Cindy. "The Invisible Hand Made Visible: 'The Birth-mark'." *Nineteenth Century Literature*. 1987 Mar; 41(4): 445-61.
- Zanger, Jules. "Speaking of the Unspeakable: Hawthorne's 'The Birthmark'." *Modern Philology*: 1983 May; 80(4): 364-71.
- アンドレア・アロマティコ『錬金術：おおいなる神秘』種村季弘 訳 創元社 1996年
- 澤井 繁男『錬金術：宇宙論的生の哲学』講談社 1992年
- デ・ロラ, スタニスラス・クロウスキー『錬金術：精神変容の秘術』種村季弘訳, 平凡社 1978年
- ホームヤード, E. J.『錬金術の歴史』大沼正則監訳, 朝倉書店 1996年
- 松尾祐美子「錬金術と科学者の狭間で：マギの末裔, エイルマー」『ホーソーンの軌跡：生誕200年記念論集』開文社 2005年
- 吉村正和『フリーメイソンと錬金術』人文書院 1998年